

子どものための音楽祭の一考察

中村 寛子

A study of Music Festival for Children

Hiroko Nakamura

Abstract :

Many classic concerts have been struggling to attract and large audience over the years. In Japan, 30 years ago, attending classical concerts was considered a status symbol in of high society. Parents wanted to take their children to classic concerts because they wanted their children to become high-society people. However, in the present day, people can select many areas of music, can listen music on many electronic mediums (and not at concert). This paper reviews the planning and management of a music festival for children including effective play management. Through this planning and management, it was hoped the concert would be fun for children and a concert children would want to go to.

Keywords: Music festival, children, classic music, concerts

1, はじめに

クラシック音楽界において、コンサートの観客離れは著しい。プロのオーケストラやピアニストの演奏会に於いても、満員になることは少なく、殆どの演奏会が空席が目立つ。クラシック音楽のコンサートと言えば、一時代前までは、ステータスシンボルであった。クラシックは上流社会に生きる人の証のような、高尚な趣味としてもてはやされた。親は子供に、上流社会で生きる人になってほしいと、クラシックの演奏会に子供を連れて行った。子供たちは、今ほど習い事に追われていなかったため、夜は親とともに演奏会に行き、夕食をして帰ってきた。高度成長期、ピアノ学習は習い事ランキング1位、ピアノの先生は女の子たちのあこがれの職業であった。クラシック音楽は、高尚だとされていた。しかし、私の記憶が正しければ、その時代も、クラシックの演奏会は窮屈で、咳一つしてはならず、おしゃべりなんてとんでもない。敷居が高いというのが一般的な印象であったが、ステータスシンボルであったため、みんな必死で理解しようし、いわば、わかったふりを

していた。言い換えれば、必死でクラシックを理解しようとしたのである。しかし、時代は多様性の時代へ、クラシック音楽はステータスシンボルとしての役割はなくなり、むしろ、いわば「高飛車な」芸術となった。一般大衆を見下すような、風潮まで出てきたのは、悲しい時代の流れである。人々は多種多様な音楽を認めるようになった。誰に何と言われことなく聴きたい音楽を聴き、行きたい演奏会に行く。クラシックを好きな人はいるが、無理に聞く必要はない。子供たちは、夜は塾や習い事で忙しく、演奏会に行く時間など取れなくなった。その結果、一般客の入場が激減した。

これではいけない、ということで、親子向けのファミリーコンサートが企画されたり、映画とコラボする企画が立てられたり、果ては落語や講談とコラボする企画が立てられたり、何とかクラシックの聴衆の増加を図ろうと「すそ野」を広げる企画が立てられているが、時すでに遅く、クラシックは時代の流れに取り残されてしまっている。

筆者は縁あって、こどもの音楽祭を企画運営するという、非常に重い責務を負わされた。子供たちがクラシック音楽会に「行きたい」「聴きたい」と思うような企画運営をせよ、ということである。全国的にも親子のための音楽祭はいくつかある。しかし、どこも似たりよつたりの企画になっている。退屈だったり、敷居が高かったり、「行きたい」「聴きたい」演奏会になるのは、難題である。

本論文では、子供たちのために、どのような演奏会を企画していくべきか、またどのような新しい企画が考えられるのかを考察していく。

第1章 音楽

第1節 音楽とは何か

この大きなテーマは、よく様々な場面、論文、書籍で語られる。そして、長い歴史の中でも語られる。プラトン（紀元前約427年～紀元前347年）は、「体のためには体育、魂のためには音楽が必要な教育であり、人間に体と魂の調和が必要とされるかぎり、徳育として体育と音楽が不可欠であると述べる。」注1（三島・筒井・福島2019年「プラトン」p.25～p.27 ed. 椎名『音楽を考える人の基本文献34』アルテス・パブリッシング）

音楽は政治学の一環であった時代である。音楽は重要な学問だった。

ルターによって、カトリック教会のミサ曲をすべてドイツ語に書き換えられ、会衆が礼拝に参加しやすい状況を作った。ルターは音楽を「神が与えた響きを持つ、美しい高価な賜物である」と考える。（三島・筒井・福島2019年「マルティン・ルター」p.113～114 ed. 椎名『音楽を考える人の基本文献34』アルテス・パブリッシング）時代とともに、音楽の地位も変わり、楽器も多種多様になる。貴族や教会の物であった音楽が、民衆の音楽へと移り、教育であったものが、娯楽になり、音楽を生業にするものが出てくる。

「音楽は言語の壁を越えて、さらには聴衆の知識や教養にかかわらず、人の心を動かす力を持っている。」注2（安原（2009年）（「芸術は人と人とをつなぐのか？」eds. 吉岡・岡田『文学・芸術は何のためにあるのか？』東信堂 p.34～p.44）

音楽は人類の発展とともに常に人に寄り添っている。大戦時でさえ、いやむしろ大戦時にこそ、音楽が人々の心に寄り添っていた。アウシュビッツ強制収容所で、ガス室の前で死を迎える前に囚人達が歌を歌った話は有名である。人々は、人間としての尊厳を守るために、そして死への恐怖から少しでも逃れるために、はたまた、囚人の連帯感を高めるために、最期の時を歌で迎えた。(安原 (2009 年) (「芸術は人と人をつなぐのか?」 eds. 吉岡・岡田『文化芸術は何のためにあるのか?』東信堂 p. 34~p. 44

第 2 節 音楽はなぜ必要か

前述のように、時代の移り変わりとともに、音楽の必要性が変わってきた。教育学や政治学の一環であった音楽が、宗教になり、貴族の娯楽となった。そして、民衆のものとなり、人間らしさを形成する一つとなった。

日本でも過日、大きな災害がいくつもあり、何万人という人たちが被災し、避難所での生活を余儀なくされた。被災した人たちは、ラジオから流れる音楽に耳を傾け、その歌詞に元気や勇気をもったり、元通りの暮らしが戻ったら、みんなで一緒に大きな声で歌いたい、楽器を演奏したい、と活力を見出していた。音楽は人が人としての尊厳を保つために、意味を持ち続ける。

現代において、音楽のジャンルは様々である。ラップ、ポップス、ロック、ヘビーメタル、ハウス、テクノ、ファンク、ビッグバンド、モダンジャズ、フュージョン、ボサノバなどに代表されるラテン、クラシック、吹奏楽、民謡、ゴスペル等々、楽器も数えきれない種類がある。まさに音楽も「多様性の時代」である。ここで言えるのは、多くの人が音楽を好きだということである。古代のように、管理された音楽としてではなく、心の赴くままに音楽を欲しているのである。そして自由に音楽を楽しんでいる。人類の多様性に合わせて、音楽も多様性の時代が来ている。逆を言えば、人類が多様性の時代を迎えても、音楽は多様性を要求されて柔軟に形を変え、人類に寄り添っている。

ただ、商業主義があまりに強く、芸術が芸術でなくなっている。芸術はメディアにとって都合の良いものしか残らないという現実を、誰かが気付いて食い止めなければならない。人間にとって本当に必要な音楽は、人間が必要と感ずるものであって、メディアの商業主義のために操作された、人工的な必要性とは違うのだと思う。

第 2 章 子どものため音楽祭

子供たちの間にも、音楽の多様性はある。しかしそれは、子供向けのアニメーション番組のテーマソングがラップになっていたり、幼児向けの NHK 番組「お母さんと一緒」のなかに出てくる音楽が、ラテンだったりする、という程度である。子供の柔軟性から、子供たちはどんな音楽でもすぐに受け入れていく。しかし、子供たちに聞かせたい音楽は、大人が厳選していく必要があるのではないだろうか。子供たちは未熟である。判断力は持ち合わせない。子供たちの心のスケッチブックは真っ白で、大人の導きによって色が付けら

れていく。そのうえで、子どもが自由にすればよいのだ。子供が自由にできることも、宝なのだ。大人が固定観念だけで物を与えてはいけない。(ここで言う子供たちは、無論未就園児である)子供たちに、価値観を導くのは大人、とりわけ親である。

その時期には、大人が判断した「良いもの」を与えたい。ここで言う「良いもの」とは、生の音楽である。CDや、スマートフォンからの音ではなく、本物の楽器の音である。また、歌詞が過激でないもの、音質が耳に心地よいもの(神経を逆なでするような音は避けたい)、心がざわついたり、ささくれ立ったりしないものである。様々な感覚に訴えるのも大切である。様々な刺激を与えられて、感性が芽生えていく。「きれい」「楽しい」「うれしい」「面白い」「ワクワクする」「ドキドキする」などのプラスの言葉で表されるような感覚を沢山経験した子供たちは、感性豊かに育っていく。また、生の音で刺激を与えられると、その刺激は直接感覚に訴えかけてくる。そして感性が揺り動かされる。(テレビや電気媒体(スマホ、タブレット等)から流れてくる音は、生の音の周波数を電気に変換しているため、空気振動が起こりにくく、感性に訴えてきにくい。無表情になりがちである)感性豊かに育った子供は、人生が豊かになる。小さなことにも幸せを見出すことができる。人の幸せは、最終的に心の中にある。物質的に満たされていても、マイナスの感情ばかりがある人は幸せを感じにくい。

子供の音楽祭を企画するにあたり、子供たちに感性豊かになってもらうべく、様々な感覚に訴えるものとしての分類を忘れてはならない。視覚、聴覚、嗅覚、触覚等の感覚に訴えるものとして、偏りの少ないプログラムを考えるということも重要だと思われる。視覚、聴覚は当然のことであるが、皮膚感覚は、刺激することが可能である。大きなシフォンの布を子供たちの上に落として触ってもらう、巨大バルーンを会場内に転がして、触ってもらう。ミストを噴射する(この中にアロマオイル等を入れると嗅覚に刺激を与えることができる)等、感覚を刺激することも工夫の一環として重要である。

第1節 子どものためのコンサートの分類

筆者は、子供の音楽祭を企画運営し始めて7年になる。7年間いくつもの試行錯誤を繰り返し、ある程度の実績を得た。また、いくつもコンサートを見たり(聴いたり)した。しかし、この2年の間、様々なコンサート、音楽祭が新型コロナウイルス感染症のため、中止、延期となってしまった。海外からのコンサートも全く行われぬ。全国(海外も含め)の子供のための音楽祭も同様にほとんど中止となってしまった。

しかし、出来る限り、プログラムを取り寄せたり、ネット配信を見たりしながら、考察を続けることとした。

1) 国内における子供向けの音楽祭の内訳

国内では、数々の子供向け音楽祭が行われている。しかし、コロナ禍、2020年は中止、2021年はオンライン配信、というところが多い。可能な限りWEB検索してみた。

	名称	主催	期間	会場
1	サラダ音楽祭	・東京都 ・公益財団法人東京都交響楽団	2021年 5月～10 月	東京芸術劇場
2	世界こども音楽祭	・エル・システムジャパン	2021年 3月29 日	東京芸術劇場
3	こども音楽フェスティバル	・公益財団法人ソニー音楽財団 ・公益財団法人サントリー芸術財団	2021年 7月17 日～21 日（中 止）	サントリーホール他
4	おんぶの祭典	・子どもたちが豊岡で世界と出会う音楽祭実行委員会	2021年 6月1日 ～6月6 日	豊岡稽古堂とその周辺
5	くまモン音楽祭～子どもが主役の復興音楽祭～	・公益財団法人熊本県立劇場	2021年 中止	熊本県立劇場
6	KOBE こども音楽祭	・神戸市小学校教育研究会音楽部	2021年 不明	不明
7	阿佐ヶ谷子ども音楽祭	・阿佐ヶ谷地域区民センター協議会	2021年 不明	東京都杉並区阿佐ヶ谷区民センター
8	二宮こども音楽祭	・神奈川県住宅供給公社	不明	神奈川県中郡二宮町二宮
9	高崎音楽祭 (0歳から親子で楽しむオーケストラ)	・高崎音楽祭委員会	2021年 10月4 日5日	群馬県高崎市高崎芸術劇場
10	倉敷の子どもたちに贈る 素敵な音楽会（オーケストラと遊ぼう）	・倉敷市・倉敷市文化復興財団	2021年 7月31 日	マービーふれあいセンター（倉敷市真備町）

WEB検索できるもの、また、日本の世界の音楽コンクール全ガイド2021（株式会社ハンナ）掲載の資料を参考にしたが、これ以上の開催が提供されていなかった。また、2021年開催も、不明なところが多かった。どこも、コロナに2年も翻弄されている感は否めない。子供たちのための音楽会は、歌ったり踊ったりが中心となるため、なかなか感染を予防しながらの開催にはこぎつけない。主催者にとっても、演奏家にとっても、つらい2年間であったに違いない。

上記の中の一つ、「こども音楽フェスティバル」を詳しく見てみたい。

2) こども音楽フェスティバル

この催しは、日本でも最大の子供向け音楽祭である。おそらく日本で最高のブレイクと予算を投じて、企画運営されているのであろう。しかし、その最高の催事が新型コロナウィ

ルス感染症のせいで、中止になっている。幸い、すべての準備が整って、ホームページも完成していたおかげで、音楽祭の中身を知ることができた。参考として詳細を挙げる。

催事名：こども音楽フェスティバル

主催：公益財団法人ソニー音楽財団

公益財団法人サントリー芸術財団

協力：森ビル株式会社

日時：2020年7月17日～21日（5日間）（すべて中止）

会場：サントリーホール大ホール/サントリーホールブルーローズ（小ホール）

出演者：指揮者7人、ピアノ7人、オルガン1人、バイオリン5人、チェロ7人、フルート2人、オーボエ2人、クラリネット2人、ファゴット2人、サクソフォン1人、ホルン2人、トランペット2人、チューバ2人、合唱団1団体、オーケストラ2団体、ブラスバンド1団体、マリンバ1人、和太鼓1団体、ソプラノ4人、テノール1人、メゾソプラノ3人、バリトン1人、子供向け歌1人、アンサンブル1団体（合計6団体+72人）

公演数：22公演

公演時間：1公演30分～1時間半

公演内容：①歌と美術の共演②クラシックの名曲コンサート③名作アニメ映像とオーケストラ演奏④金管5重奏演奏⑤パイプオルガンコンサート⑥ピアノのレクチャーコンサート⑦吹奏楽名曲コンサート⑧木管3重奏演奏⑨0歳からの和太鼓演奏⑩弦楽5重奏演奏⑪オペラ⑫ピアノ演奏会（1台～6台）⑬満天の星コンサート⑭妊婦さんにやさしいチェロの響き⑮お昼寝ゴロゴロ・ときどきコンサート他

演奏会詳細（一部抜粋）：「妊婦さんにやさしいチェロの響き」妊婦さんとご家族、ご友人のためのコンサート。人の声が一番近いといわれる楽器「チェロ」の豊かな響きを、リラックスしてお楽しみください。

「満天の星空コンサート」最新技術を駆使して開発された MEGASTAR-II が映し出す 1000 万個の星空の元、真っ暗な空間でゆったりくつろぎながら楽しむコンサート。星や天体にまつわる曲を中心に。

「お昼寝ごろごろ・ときどきコンサート」ゴロゴロ休憩しながら、時々ミニコンサート&様々な楽器を知って楽しむコンサート

参考資料：[こども音楽フェスティバル ホームページ](https://www.kofes.jp) [こども音楽フェスティバル](https://www.kofes.jp)

注3(<https://www.kofes.jp>)

一流の出演者、最高の会場、潤沢な予算がうかがえるプログラムである。コンサートの中身も良く工夫されていると感じる。子供に一度は聞かせたいオーケストラの迫力ある響き、映像やお話を交えた、わかりやすいプログラム進行。さすがに一流の音楽企画だと感じる。このコンサートに参加できる子供たちは幸せであることは間違いない。楽しい時間を過ごしてくれるだろう。コンサートのタイトルが細分化されており、参加する方がわかりやす

いのがとても良い。よくある、高飛車な演奏会企画ではなく、参加者が興味を持ちやすいタイトルである。演奏のプログラム自体は記述がないのでわからないが、タイトルだけで想像が膨らみ、ワクワクする。演奏会タイトルは重要であることがわかる。少し気になるのは価格帯である。どのコンサートも0歳児から入場料が必要である。500円から2000円の範囲内ではあるが、東京では、当たり前なことなのだろう。地方都市では、間違いなく敬遠される。入場無料なら集客できるが、有料となるとかなり集客のハードルが上がる。文化の地域格差をまざまざと見せつけられる。教育や文化に格差があってはいけない、と思って地域の文化振興に立ち上がっている団体は少なくない。しかし、大きなホールを持っていたり、大きな財団が文化振興を支えてくれたりする都市は、日本には少ない。そのための補助金や助成金は、宝くじに当たるより少しマシな確率で、採択されることもあるが、50万円から100万円の範囲である。会場費にしかならない。一流の演奏家の招聘は無理だし、MEGASTAR-IIは使えない。オーケストラも使えない。少しずつ規模を小さくして、オーケストラではなく室内楽、オペラではなく、歌のお兄さんお姉さん、MEGASUTARではなく、ミラーボール、という具合である。それでもどうにかできることを探して、一歩ずつ子供たちのために企画運営するしかないのだ。

ホールを暗くして星空を移すことは工夫をすればできるはずである。この催しを参考に、沢山のアイディアをもらって、地方の子供たちに届けるべきである。

3) タイプ別コンサートの分類

演奏会を企画する時、殆どが経験に基づいたプログラムとなる。ピアノの演奏会なら、バッハから始まって、古典派のソナタの後休憩、その後リストのソナタや、ブラームスの変奏曲などの大曲を一曲、というような風である。音楽祭では、演奏会をいくつも配置する。特に子どもの音楽祭となると、子どもたちに1時間半~2時間の演奏会は提供できない。大人でも、そんなに長い時間の集中は無理である。そこで一つの公演を30分~40分に設定する。子供の集中がどうにか続く時間である。一つづつの演奏会の企画を根本から見直して、コンサートを何らかの形で分類をし、演奏会配置をしなければいけない。そこで、タイプ別分類を活用した工夫はできないか。コンサートには視覚を駆使したもの、触覚（皮膚感覚）を使ったもの、等がある。ここで筆者なりの分析を試みようと思う。コンサートを(A)視聴型コンサート(B)参加型コンサート(C)Story型コンサート(D)体験コーナーに分類してみようと思う。

A) 視聴型コンサート

これは、一般的によくあるコンサートで、司会者や、出演者のインタビュー、曲目解説があったとしても、聴衆は「聴く側」であるコンサート。ピアノのソロコンサートや、オーケストラのコンサートはこのタイプがほとんどである。ステージのスクリーンに絵本を映し出すコンサートや子供向けのオペラ（キャストが子供向けだったり、客席から登場したりなどの工夫があった）は、やはり、この「視聴型コンサート」に分類するものとする。

また、前出のこども音楽フェスティバルの「満天の星コンサート」のように会場を暗くして、星を映し出すというアイデアも良い。

視聴型コンサートに視覚を強化したもの➡

- ①スクリーンに映像を映し出す。(絵本や動画)
- ②巨大模造紙に音楽と同時に絵を描いていく。
- ③天井から花卉や雪が降ってくる
- ④着ぐるみを着たキャラクターが現れる
- ⑤バレエと組み合わせる。

B) 参加型コンサート

Aの視聴型コンサートよりも、聴衆が参加して進めるプログラムとする。➡

- ①参加者が手拍子、足拍子などのボディパーカッションを行う。(ボディパーカッションだけで一曲仕上げても良いし、曲中に短くその部分を入れ込む)
- ②体操をする。出演者はステージの上で、参加者は客席で、会場が一体となる。参加が子供なので、オーケストラピットの座席を外して開放し、そこで踊ったり体操できるスペースを作る
- ③歌の一部を観客が歌う。繰り返し同じ場所で、観客が歌う場所を作る。「こぶたぬきつねこ」ではリフレインを観客が歌う。「ミックスジュース」では「ミックスジュース」の歌詞は観客が歌うようにする。等々)
- ④客席を二つに分けて、下手側は曲を「わんわん」という歌詞で歌い、上手側は「にゃんにゃん」という歌詞で歌う。ステージに立っている出演者が指揮をしてフレーズ毎にワンやニャンで歌を進める。「小さな世界」や「ミッキーマウスマーチ」を使うと面白い)
- ⑤絵本の読み聞かせに歌をつける。ページをめくる時に必ず歌う歌をつけて、参加者に歌ってもらう。
- ⑥全員に楽器を配る。(ここで言う楽器は、もしできれば別室で子供たちが作れるものが良い。新聞紙を折りたたんで「メンコ」、画用紙とゴムで「ギター」、ペットボトルと小石や豆で「マラカス」、少し大きな空き缶で「太鼓」等。曲の中で参加する場所を作る。ただし、危険でないものが良い。割りばし等をスティックがわりにつけたいが、走っていて転倒の拍子に体や顔に突き刺さる、という事故がよく起きる。子どものための音楽祭で子どもの事故は絶対に起こってはならない。

この参加型コンサートは、参加者を置き去りにせず、退屈にさせない。積極的に聴衆を聴衆から共演者にしていきたい。

C) Story型コンサート

これは、コンサートそのものがお話の中にあるような、お話と音楽が一緒になったコンサート。出演者は演じなければいけない。絵本であればスクリーンに映し出す。お話は何でもよいが、途中途中に出てくる歌や、音楽とマッチしなければいけないので、かなり慎重

に組み立てが必要。まさしく体験することが中心のコンサート。だが聴衆が全員で体験するのはなかなか難しい。参加型コンサートと重なる部分も少なくない。

➡

例1：①コンサート全体が一つのお話になっている。（5ひきのすてきなねずみ～音楽会の夜～）

②参加者（子供たち）呪文を唱える役を負う。その呪文を言うことでお話が進んでいく（猫のお医者さん、子供たちが「にゃー！」ということで、患者が治っていく）

例2：①コンサートの中にお話しと、一緒に歌いましょう等コーナーがある

②お話コーナーでは、ペープサートやパネルシアター、スクリーン等で小さなお話をしながら演奏や歌を挟む。

③一緒に歌いましょうコーナーでは、子供たちが参加できる歌を用意する

例3：①コンサート全体がオペラ、オペレッタのようにになっている。

②出演者が歌でコンサート進行する

D) 体験コーナー

コンサートではないが、音楽祭の中に体験コーナーを用意する。

例1：発声練習の体験

例2：指揮の体験（オーケストラの指揮）

例3：楽器を作る（複数の演奏会で活用できるもの）

例4：リトミックコーナー

例5：子供たちが絵を描き、ステージを飾る

例6：・楽器体験コーナーの設置、バイオリンやチェロ、管楽器、打楽器を弾いてみよう
・見たことない楽器を叩いてみよう、ハンドパン、銅鑼、ささら、木魚、ビブラスラップ、竹のドレミパイプ（壊れにくく、演奏しやすい楽器）

例7：子供たちがホールのパイプオルガンを弾く

第2節 感覚別に考えるコンサートの分類

前項では、演奏会のタイプを分類してみた。本項では、演奏会を感覚別にさらに分析し、様々な刺激を余すことなく子どもたちに与えることで、子どもが飽きることなく演奏会に次々に参加し、感性を育成できるプログラムを考察する。

視覚	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本 ・パネルシアター ・スクリーン（静止画） ・スクリーン（動画） ・照明（明るい、暗い、色が変わる、） ・キャラクターの登場 ・目の前でプロが音楽に合わせて絵を描く 	参加型 Story型
----	---	---------------

聴覚	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な楽音（様々な楽器、歌） ・自然の音（鳥の声、風の音、雨の音等） ・雑音（車の音、人の雑踏等） ・人工的な音（超音波、ブルドーザーの音、自動車のモーター音） 	視聴型 参加型 Story 型
嗅覚	将来的に可能であれば導入（館内の扇風機にミストを噴射（アロマオイルを入れる）を拡散） カレーのにおい、花の匂い等）	
味覚	不可	
触覚	<ul style="list-style-type: none"> ・手をたたく、床を踏み鳴らす（リズム感） ・バルーンを客席に転がす（バルーンの柔らかい感覚） ・シフォンのレース（柔らかい感覚） ・全員で太鼓を叩く（冷たい感覚、たたく感覚、リズム感） ・新聞を折ってメンコを作り、鳴らす（指先を使った感覚、紙を触る感覚、腕を振る感覚） ・楽器を作る（折り紙、のり、はさみ、などの工具を使い、手作り楽器を作る） 	体験型
運動領域	すべて音楽に合わせて <ul style="list-style-type: none"> ・スキップ ・片足で立つ ・足を開く ・その場で駆け足 ・ジャンプ ・止まる ・歩く（早く、ゆっくり、静かにバタバタと）等 	参加型

この考察には、多分にリトミック的要素を多く取り入れている。リトミックは子供たちに、音楽と同時に運動領域からの刺激を与えながら、様々な感覚を培っていく幼児教育である。皮膚感覚も、柔らかい、固い、冷たい、温かい、とがっている等、音楽とともに感覚を刺激する。また、よく「聴く」ことで、集中力を育成したり、「集団で行う」ことで、人間関係形成のための必要なことも少しずつ学ぶ。

上記表のすべての分野に訴えかける音楽会ができれば、子どもたちは飽きることなく様々な演奏会に参加し、感覚は刺激され、感性豊かに育つことが期待される。

第3節 室内楽の杜～子どものための音楽祭～実施例より

筆者は2016年から「室内楽の杜～子どものための音楽祭～」(主催 NPO 法人 MusicNetwork すみれ会、鳥栖市、鳥栖市教育委員会、鳥栖市文化事業協会)を企画運営してきた。特徴としては、館内5会場をすべて使って、8つの催し物をし、子供たちのすべての感覚を刺激できるような企画を実行したことである。

下記に2019年の音楽祭実績を掲載する。

	公演名	内容	会場	入場者数	タイプ
1	虹の始まり	ステージ上に子供が描いた絵とアーティストの作品を飾り付ける	大ホール	170人	体験型

2	行こう！音楽島	歌とお話し (一緒に歌って踊ろう)	大ホール	130人	視聴型& 参加型& お話
3	マリンバ・アンサンブル	みんなで打楽器を叩こう	大ホール	110人	視聴型& 体験型
4	音と物語の「音語り」	ライブで音楽に合わせて プロが絵を描く	小ホール	250人	視聴型
5	ハンドパン演奏	プロのハンドパン奏者の 演奏、体験コーナー	小ホール	130人	視聴型& 体験
6	うれしい、楽しい・親子リトミック	親子リトミック体験	美術工芸室	180人	体験型
7	お話・音楽・玉手箱	パネルシアターと音楽	研修室	232人	参加型 視聴型
8	バイオリンを弾いてみよう	バイオリン体験コーナー	会議室	222人	体験型

関連行事

①	スタンプラリー	演奏会に参加してスタンプをもらい、記念品をゲット	各会場		参加型
②	怪獣やパンダ(着ぐるみ)とじゃんけんしよう	じゃんけんでスタンプをゲット	各会場ロビー		参加型 体験型
③	シャボン玉を使用	シャボン玉セットを無料配布	会館外の公演		参加型 体験型
④	キッチンカー	親子連れが一日楽しめるように、食事もできるコーナーを設置	会館外の公園		

注4：出典：第4回室内楽の杜～子どものための音楽祭～事務局

今後、地域の大学や専門学校に、会場案内のボランティアを要請したり、保育科の学生たちに演奏の場やリトミック実践の場を提供するべく、広がりを考えていきたい。

第3節音楽祭運営ための重要事項

室内楽の杜～子どものための音楽祭～は、2016年から始めた音楽祭であるが、何年もやってみると、だんだん意外性がなくなる。

参加してくれる親子が見て「きっとこんなものをやるのだろうか」と想像がつく演奏会はつまらない。「プロの手が入ると、こんなにすごいものになるんだ」という驚きと意外性が要求される。「きっと今年もこんなことやるのだろうか」と見くびられるようでは、企画として失敗である。きっとこんな物だろうと思っていた演奏会が、とっても面白かった、とってもすごかった、とならなければ、市民権は得られない。

しかしそのためには、とても高いハードルがある。演奏会の数だけ、アーティストがいる。そのアーティストにきちんとしたテーマと、タイプ別分類による内容を伝え、進行表を作

ってもらい、何度も進行表に注文を出し、改善してもらいながら組み立てなおす、という工程が重要である。主催側、企画者が強い信念を持たなければ、経験によるありきたりの演奏会になりがちである。演奏家は演奏だけしていたいものである。様々な企画があることをあまり知らない。演奏家は、様々な、幼稚園、保育園、老人ホーム、病院、小学校、中学校に訪問演奏に行く仕事が多い。それぞれのニーズに合わせて、演奏会を組み立てているか、しゃべり方を変えているか、何らかの工夫をしているか（老人ホームでは、一緒に歌いましょうのコーナーを作り、歌詞カードを作っていく、読み聞かせの大型演本を持っていく（花さきやま、モチモチの木など）幼稚園、保育園では、視覚に訴えるものを一つでも用意しているか、それぞれ教えてあげるべきである。

子どもたちの感性を育てていくのと同じくらい、若手音楽家を育成するのも重要な責務である。（これがなかなか、苦勞する点ではある）

全国を見渡しても、大きな音楽祭を企画運営しているところでは、実行委員会を立ち上げ、何度も会議を重ねている。たくさんの職人（照明、音響、美術家、音楽家、音楽事務所）の手によって、様々なアイデアが出され、精査されて行かねばいけない。沢山の人がかかわっている企画運営の方が良いものが生み出される可能性が高い。一人のプロデューサーが企画運営している音楽祭は、早く飽きられている例が多い。鳥栖市の音楽祭もそうならないように、多くの人の運営を心がけなければいけない。

1) 意外性

このテーマは非常に難題である。しかし、この難題をクリアすれば、子どもにとっても、子どもを連れてきてくれた保護者にとっても、演奏者にとっても、有意義なコンサートになることは間違いない。そこで、いくつか例を考えてみることにする。

1	巨大バルーンを客席に向けて転がす	柔らかい特殊ゴムのバルーン。曲の中で舞台から客席に転がす。子どもたちは触る感覚が大好きである。ただし一曲のみにする。会場がざわついて、集中できなくなる。	皮膚刺激 視覚刺激
2	ミストを客席に向けて噴射（アロマオイル等の匂いを混ぜる）	曲の中で「お花の匂い」というものがあれば、そこで流す。また、風が吹いてきたよ、というところでは、扇風機の風を流す。	皮膚刺激 嗅覚刺激
3	全員で太鼓を叩く（子供たちによる手作り太鼓）	演奏者の指示のもと、リズムを刻む。3種類の音が楽しめるので、様々な音の違いを感じていく。	皮膚刺激 聴覚刺激 リズム感の育成
4	演奏者が子供たちの横で演奏する	演奏者が客席において、子どもたちの隣で演奏する。	聴覚刺激 皮膚刺激（音の振動が直接伝わる）

5	発声練習をする（その後子供と一緒にオペレッタを進行しても良い）	オペラの発声を体験する。声楽科の超えの大きさ、声による振動を体感する。	体験 皮膚刺激
6	会場を真っ暗にして演奏する（星空を映し出す）	星空の幻想的な空間を体験するとともに、想像力を育成する	視覚刺激
7	竹を使った楽器を叩くコーナーを作る（ドレミパイプ竹バージョン）	竹でできたドレミパイプを叩いてみる。	体験 視覚刺激 聴覚刺激（竹の不思議な音がする）
8	ヨガ体験コーナーを作る 音楽と一緒に（民族楽器を使った音楽を演奏）	親子ヨガ体験。刺激と瞑想を体験して、心を落ち着かせる。	体験 全身の筋肉刺激
9	ボディミュージックコンテストを実施する	ボディミュージックの演奏を聴く。コンテストに参加する。	体験
10	子供の歌コンテストを実施する	プチコンテストを実施。1位、2位ではなく、ステージで歌う体験をしてもらう。参加賞を出す。	体験

2) 企業協賛の在り方

「子供の音楽祭」と銘打つものは、全国的に見ても規模がかなり大きいものが多い。オーケストラが参加したり、オペラの公演をしているところもある。予算的にかなり大規模であることは想像に難くない。行政の補助金や助成金制度、企業の補助金制度を活用しなければ、とても個人やNPO法人等でできるレベルではない。

子供たちのことを考えると、潤沢な予算の中で企画を考えたいものである。子供たちのあらゆる欲求にこたえられる、様々な刺激が用意された音楽会が準備できたら、演奏家として、企画者として、参加する子供たちにとっても、こんなに幸せなことはない。様々な企業が助成金を用意してくれているのは本当にありがたいことである。

しかし、今回それとは別の形の協賛を試みた。

株式会社共栄フーズ（京都市）に、珈琲缶（アルミ製 1L）の提供をお願いしてみた。子供たちが太鼓を作り、全員で合奏するという企画を立てたが、参加する子供たちが、平均でも150名以上いる演奏会で、全員が太鼓を持つとなると、企画としては厳しい。空きペットボトルに小石又は大豆を入れて、マラカスを作ることはよくあるが、コロナ禍、だれが飲んだかわからないペットボトルを使うのは抵抗がある。そこで、珈琲缶に行きついた。缶の表面を消毒するのは容易であるし、手で蓋を叩く（蓋はプラスチック製である）、側面を叩く（金属製）、底を叩く（金属製で中は空洞）、と3種類くらいの音がする。大きさもわきに抱えられるくらいで丁度よい。子供たちに、画用紙やシール用紙に絵を描いてもらい、張り付けるのもよい。思い切って協賛をお願いしてみたところ、共栄フーズ側から、「製缶会社から缶を購入し、コーヒー豆を入れるときに出る、廃棄処分にする缶（塗装が

ずれた、少しの穴が開いた)を提供しましょう」と言っていた。100 缶以上が少しづつ送られてきている。(筆者もちろん、沢山の共栄フーズのコーヒーを毎日飲み続けた)協賛金という形ではない、協賛の在り方を、企画側から提言していく形。どちらにとってもマイナスはない。ウィンウィンの形である。本来協賛とはこのような形であるであろう。企業側にとっても、企業イメージを上げることができ、節税にもなるもの。企画する側は、そのイメージをしっかり持って企業側にアプローチしなければうまくいかない。少ない資金繰りの中で、出来ることを考えていけば、沢山の工夫ができることを改めて気づいた。協賛金ばかりをあてにしている、企業側も承諾してくれないであろう。

終わりに

子供たちが生き生き育つことは、この国の明るい将来のためであることは言うまでもない。政治家は自分の政治生命の間だけの名声を追い求めているようだが、子供たちの明るい未来を見てもらいたいものである。子供である時代に、どういう刺激を受けて、どんな感性が育つか、は大人次第である。

企画は第1点として、様々な感覚に訴えかけることを忘れずに、プログラミングすべきである。様々な刺激を受けて感性豊かな子を育てるのが、この音楽祭の第一の目標である。また、第2点目として音楽好きな子供をたくさん育てなければならない。第1点で挙げた感性が育つという面に加え、演奏会に行こうと思ってもらうことが重要である。それは、音楽を生業とする者たちのため、だけではなく、演奏は直接聞くものであるからである。様々な電子媒体(スマートフォン、タブレット、テレビ、CD等)を通して出てくる音は、心に伝わりにくい。聴覚を多少なりとも刺激はしても、皮膚感覚は刺激しない。直接の空気の振動ではなくなっている。(可聴周波数以外の音はカットされている)

第3点として意外性を念頭に置いて、マンネリ化のない企画運営をしていかねばならない。どんなに良い演奏をしても、子供たちは飽きやすい。大人も知らない曲が長く続くと退屈と感じる。子どもたちに「ワクワク」してもらおう企画を考えなければいけない。

演奏会の題目にわかりやすさをプラスすることも、考えに入れなければいけない。

私は音楽と保育に携わっているものとして、できうる限りの知恵を絞り、音楽祭をたちあげた。中身は少しずつ、時代とともに変化すべきであるし、反省があり、改善があつてしるべきである。もちろん新型コロナウイルス感染症のような、大きなマイナス要因があつて、身動きできなくなることもあるであろうが、それもまた勉強である。きっとできることはあるはずである。コロナ禍でも子供たちは育っているのだから、私たち大人が止まってはいけないのである。日本の、世界の子供たちが健やかに育ってくれることを、心より願っている。

参考文献

注1：「音楽を考える人の基本文献 34」椎名亮輔編著、三島郁、筒井はる香・福島睦美著
2019年 株式会社アルテスパブリッシング発行「マルティン・ルター」p. 113～114

注2：「文学・芸術は何のためにあるのか？」吉岡洋、岡原暁生編著、野崎敏、山田広昭、
田尻芳樹、安原伸一郎、出原隆俊、大原宣久著 2009年 株式会社東信堂発行『芸
術は人と人をつなぐのか？』安原伸一朗著 p. 34～p. 44

注3：ホームページ こども音楽フェスティバル <https://www.kofes.jp>

注4：出典、第4回室内楽の杜～子どものための音楽祭～NPO 法人 MusicNetwork すみれ会